

とみらいテラス雑感 vol.13

『科学と文学』【影響（その1）】

今回は真剣に「ライトノベル」について、語りましたが、今回からは真剣に「影響」を受けた作品や作家について語っていきます。

「影響」といっても一概にまとめて語れるものではなく、その時々状況によって「影響」を受ける作品や作家なんかは変わるものなのです。

前回までも、「影響」を受けたものを紹介してきましたが、今回は、「モノの捉え方」に大きな影響を受けた人物についてになります。

その人物は寺田寅彦という方になります。この方は、物理学者でありながら随筆家や俳人でもあります。

物理学の分野では、身近な物理現象も研究対象としていて、例えば「金平糖の角の研究」などは良い例かもしれません。これらを「寺田物理学」なんて呼んだりもするそうですが・・・

世には多才な人が多くいますが、専門的な内容を専門書に書くのとは異なり、物理学のような一見難しそうな分野の事柄を、身近にあるものを通じて、多くの人々に届けるために「随筆」という形態で実践した人物なのだと捉えています。

私も以前書いたように、考古学を専門的に学び、学者でこそありませんが、それを食い扶持としてきました。遺跡から検出された遺構や出土した遺物について、報告書や論文として執筆したこともありますが、これは一般の人々に伝えるという視点ではなく、同業者向けの側面が強かったと思います。

逆に一般向けの文章と言えば「富里市文化財保存活用地域計画」の中にある関連文化財群に関するもので、文化庁からは「ストーリー性を持たせ、一般にわかりやすく」という方向性が示されていたこともあり、大いに戸惑った経験もあります。出来の良し悪しはわかりませんが、とみらいテラス2階の郷土資料展示室にパネル化してあります（富里市のホームページでも掲載中）ので、興味を持たれた方は読んで感想を頂けると幸いです。

話を寺田先生に戻しますが、このような姿勢というか、研究者としての実績もあるのに、身近なものに潜む疑問点と向き合い、その疑問に対して自らの知見で考察していく姿に、「自分もこんな風に物事を捉えたい」と強く思ったのと同時に「日常の中にある様々なものに興味を持たなければ！」などとも思った次第です。

因みに寺田先生の随筆で一番好きなのは「電車の混雑について」です。

吉林昌寿

とみらいテラス雑感 vol.14

『段取り』【影響（その2）】

前は真剣に「影響」について、寺田寅彦先生に関して語りましたが、今回は海外の方の登場です。

海外の方といっても、お隣中国の歴史上の人物というか書物になりますが、皆さんは『孫子の兵法』をご存じでしょうか？

所謂、兵法書のひとつであり、兵法書の中でも結構有名なひとつと言えるかもしれませんが、別に軍人を目指したわけでもなく、最初は vol.5 で語ったように「いち推し」武将である武田信玄が用いた『風林火山』旗指物が切っ掛けになりますね。

ご承知の方も多いでしょうが、『孫子』とは人物ではなく、作者は春秋戦国時代の『孫武』という方だと言われています。別に専門家でもないので詳しいことはわかりませんが、『孫子』といは『孫武』個人を指すものではないようです。

まあ、それはさておき『孫子』から受けた「影響」なんですが、「分析」することの重要性を知ったことが挙げられます。「分析」するには正確な「情報」が必要不可欠であり、「情報」を集め、それを「分析」できる能力が必要になるということに気が付きました。

当時は今のようにインターネットなんて無かったので、新鮮な「情報」は新聞やテレビからがほぼ全てでした。今から思えば純粹に新聞やテレビの「情報」を信じていたんだけどね・・・

まあ、「情報」の精度と偏向性を見抜けなかった時点で、良い「分析」ができるとは思えませんが、「分析」の手法は多くの種類があり、「客観性」を担保するためには、複数の手法で「分析」し、同じ結論に至るかどうかを鍵になるのだと思っています。そして、この「分析」する手法は、書籍でしか得ることができなかつたと感じています。

最近、『孫子の兵法』をビジネスなどで活かそうなんて書籍を見かけることがありますが、ある意味納得できる部分はあるかなあと思ったりしています。

『段取り八分、仕事二分』なんて言葉があるくらい、物事の多くは『段取り』が重要であることが多く、この『段取り』こそが、より良い「情報」を収集し、多角的な「分析」をすることが基本なのだと思えてなりません。

それでも全ての物事が上手く進む訳でもないんですが、「行き当たりばったり」で進めるのではなく、『段取り』を踏むことで、失敗の原因も掴みやすくなるので、興味のある方は内容だけでも知っていて損はないはずですよ。

吉林昌寿